

## <随想>表章先生のこと : 卒業論文面接の思い出

著者	片桐 登
雑誌名	日本文学誌要
巻	57
ページ	111-113
発行年	1998-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019999">http://hdl.handle.net/10114/00019999</a>

## 表章先生のこと

卒業論文面接の思い出

片桐 登

表章先生と私は、もう間もなく四十年にもなろうという、長い付き合いが続いております。付き合いなどと口幅つたいことをいっても、その始まりが表先生に卒業論文(学部)のご指導を受けることになったその時からなので、基本的には「先生」とその「教え子」の一人と言う関係であり、それは当然ながら今も変わりありません。ただこの長い間には、大きな幸運に恵まれた私が、初めに研究助手の席を与え

られ、次いで教養部教員に採用されると同時に能楽研究所所員を兼ねることになるなど、身分上の変化も生じ、おおけなくも先生の同僚という形で勤務してきました。もちろん、右のような私の節目節目には表先生(および多くの先生方)の強力なご支援があったことは言うまでもありません。それだけに、『誌要』編集委員の要求に応じて、表先生のことを書くうとすれば殆ど尽きることは無い、といっても過言ではないのです。たくさん思い出のうちで、今でもこれにまさる強い衝撃を受けたことはない、おりにふれて思い出すことを書くように思います。

さて、衝撃というのは外でもない、学部四年次生のとき卒業論文面接試験のときに受けたものです。今はもうなくなってしまった大学院棟の一室で面接試験が行われました。

ドアを開けて入室した時、大きなテーブルの前に三人の先生が並んで座っておられました。この三先生はどなたも教室の内外で親しくご指導いただいたおり、ここにおられるのは至極当然のことでした。表先生と阪下圭八先生(後に東京経済大学教授)と少壮のお二人を左右に、当時すでに七十歳になられた白髪の西尾実先生(当時国立国語研究所長と兼務)が

中央に座っておられた。どなたのご指示であつたか「その椅子へおかけなさい」の声にしたがつて、テールブルのこちら側に一つ置かれた椅子に腰を下ろしました。いや下ろしかけたそのとたん、尻が椅子に着くより早かつたと今も確信しているのですが、「君の論文は……なら落第だ」という表先生の声が耳に飛び込みました。飛び上がるほどに驚くといいますが、そういうことが実際にあるものです。ガタンという大きな音を立てて、椅子の上に尻が落ちたことが分かりました。見ておられた先生方はおかしかったに違いないのですが、私にはそれどころではありません。なにしろ、最初の一言を聞いたところで、頭の中は完全に真っ白になっています。質問を想定して少しは準備しておいたつもりなのに、すべて跡形もなく消滅したうえに、口述試験はいま始まったばかりなのですから。表先生にはそんな斟酌はもちろんなく、さらに畳み掛けてきます。「君がこの作品の研究を通して書いてきたうち、○○について言えば、明らかに誤った結論を出している。なぜそうなってしまうたか分かるか。この問題に関連して、こういう資料があると指摘しておいたのに、その資料を見なかったからだ。そのために君は先人の誤りを指摘

できなかったただでなく、君自身も誤ることになってしまったのだ。せつかく教示された資料を、君はサボッていて調べなかった。君の学問的態度を疑う云々云々」。返す言葉はありません。もちろん思い当たることあるだけにです。苦い思いを噛み締めるなどというのでは全くありません。そのあとのやりとりは恐らく支離滅裂だったことでしょう。何を聞かれたのかも記憶にないのですが、ただただ「忘れしました。いや覚えていません。調べませんでした」と繰り返すばかりでした。にこにこ（そのように見えた）見ておられた西尾・阪下両先生が差し延べて下さる、親切な助け船にも乗ることあたわずで、実に惨憺たるものでした。しばらくしてようやく、「旧制なら落第だ」との本意がわかって、落ち着きを取り戻したころには、表先生は「片桐の論文には実はこんな新見があり、またあんなことも書いてあるので、それが、それらは……」と両先生に説明なさつて、お三方であれこれと話しておられました（そんな記憶があるのです）。なすところなくチョコンと座った私は全く格好がつかない状態でしたが、先生はすぐにこちらを向いて「では、これで」と、面接の終了を告げられたのでした。

右の口述試験のためにどれほどの時間を要したのか、覚えていません。面接室を後にした私は強く打ちのめされていたことはもちろんです。といっても、「落第だ」と言われたのがショックだったのではありません。資料の存在を承知しながら調べなかった私に向かって、大きな声で「君の学問的態度を疑う」とまで言い切った、表先生の厳しい態度と言葉こそが衝撃だったのです。

自分のごときまだ学部、多分に未熟な学生が書いた卒業論文ではあってもいい加減なことは許さないとする、反省を強く求めてのお言葉だったのだと思います。しかしこのことは、先生が私の卒業論文を真正面から取り上げ、読んで下さった事を示しているのです。結果はどうあれ、一年かけて取り組んできた卒業論文は、実に、正当な評価を得たというべきでありました。

この日の、先生の厳しい態度と言葉とを、私は決して忘れることはありません。それだけではなく、この強烈なお言葉を生涯心の中に刻み付けておこう、とそのとき思ったのです。この言葉をどう受け止めるか。それはその後も研究に携わるのか、全く別の道を歩くことになるのか、そのようなこととは

全く関係のない、一人の人間の生き方に関係する問題だと思ったからなのです。

四年次生になる直前に、先の西尾先生のご紹介で、卒業論文のご指導を表先生から受けるようになり、能楽研究所へ入り浸り、鴻山文庫での資料閲覧など便宜を計らって頂くなど、いま思い返してもこれ以上ない恵まれた時を過ごし、研究することの楽しさと難しさも、また同時に学びました。しかし、あえていえば、この日から、面接試験のあったこの日から、私は違った出発することになったのです。表章先生のあの厳しい態度とあの言葉とによって。

(かたぎり のぼる・一九六一年卒)